



六花
9

俳句雑誌りつか
2018（平成30年）
cover design ichigo

山田六甲

茗荷飯

道

端溪を罪ほろぼしに洗ひけり
夏柳蔭さす魚の背中かな
茗荷飯一礼をして箸をおく
底紅に韓くれなぬのくくりかな
邯鄲や急坂にして切通
病葉をすべりさうなる古法華
ふくよかな笑み三尊の西日中
鎖場は雁の渡しの空にあり
秋風に危なき橋の吊られあり
秋雲を生む岩山の古法華
木下闇仏を刻む石寝かす
古法華八月二十二日晴



睡蓮に及びてゐたる秋旱
近道を迷ひつくつく法師かな
台風の近づいてゐる摩崖仏
秋風やまるごとしぼつたぶだう飴
西日さす摩崖の仏目をつぶり
堂裏は笠松山や秋の雲
台風の直撃近き逢瀬かな
落蝉を伺ひにくる蟻もなし
驚きしさまにくちなは果てゐたる
昼月にさらりと分かれきたりけり
鮎落ちるタイスの瞑想曲にのつて

雪嶺抄

天道虫

笹村 政子

川音を越え来る一番虫かな
欄干の冷えてきてをり虫の夜
さざ波に月の崩るる虫かな
敷藁の新しくある花西瓜
干梅を返せば匂ひ粗蕙
木漏日や森の奥なる瓜畑
下校児に案内をさるる青田風
てのひらに天道虫のまどひかな
翔ぶまでは少年のもの天道虫
黒南風の鐘楼に灯のともりけり

高華抄

かたつむり

佐津のぼる

いつもより遠出の散歩薫風裡
病葉のしばらく流れ沈みけり
近道の子の丈隠る青芒
出水引く仮の橋架け通学路
空瓶のななめに浮きて梅雨の川
どこが首どこからが胴かたつむり
蜘蛛の罫に糸の無駄も見当らず
百の足きちんとそろへ蜈蚣死す
ぼうふらの踊る破船の溜り水
仏の灯のみの内陣五月闇

教へ子に母の面影聖五月

善野 行

わぶ人に夜をかけて鳴けほととぎす
さざ波をこらへて鷺の発ちにけり

夏燕鼻先へ来てひるがへす

緑蔭に鯉のうねりの波至る

おしえごにははのおもかげせいごがつ ぜんの こう

教師は女生徒に対し、個人的感情を持つことを常に抑えておりながら、こういう思いがふと脳裏を過ると「いけない、いけない」と無意識に打ち消す。しかし母への思慕が強い作者が詩歌に代弁させるのは自由である。自由というより詩欺に解放してよいのである。彼の心から行方不明になっていた母親が目の前に帰ってきたような心地がしたのである。

座五の「聖五月」（聖母マリアの月）というのには、「角川季寄せ」には「美しい季節を称える心も加わって『聖五月』と呼ぶ」とある。取り合わせの句は忘れやすいが、この句は忘れえぬ句になる。

雪卿集 せつけいしゅう

志方 章子

出口 誠

目の覚めんばかりに咲けり白つつじ

花水木日差しに色の溶けにけり

母在す空に風船上げにけり

子供の日亀捕まへに行くと言ふ

八方に広がる紫蘭雨上がる

円らな目我を見てゐる若葉風

葉の中にまぎれてしまひ雀の子

麦秋や三三五五の下校の子

傘持たぬ猫が我見る梅雨かな

手まり花何度も濡れて色変はる

白色のままもありてや手まり花

へいの外のぞいてをりぬ手まり花

片陰に崩れる不安感じけり

汗かきてカードゲームに精出す子

扇風機妻の寝顔をなでてをり

勉強をせぬ言ひ訳や夏の暮

藤生不二男

との曇る因幡街道桐咲けり

梯子して沖をはるかに袋掛

南風白兔の海のきららかな

玫瑰や白兔の沖を見て飽かず

浜昼顔砂の風紋渚まで

沖を見る白きレーズの夏手套

浜昼顔砂にあそべる指の美し

旅了る借りしハンカチそのままに

永田万年青

もつれつつ垣根越えゆく梅雨の蝶

三重の尖塔光る若葉風

到着の順に麦茶を配らるる

職人の麦茶の薬缶まはし呑み

平成の合掌強く沖繩忌

平成の子に教へたる祭笛

平成の三災七難走馬燈

平成の荒梅雨河を壊しけり

升田ヤス子

玫瑰の実や夕映の沖に鳥

小流れの音の消えさう幽霊茸

文字化けのメール白夜の幽霊から

麦茶かな嬰のストロー吸ひ始め

みささぎや葦の風ゆく毀ち橋

逆光に浮かんでゐたる蓮の花

時計草足下は古墳かも知れず

虎が雨端切れ糸くづ散らかして



雪樹集

廣畑 育子

須磨寺に潮の香の来ぬ梅雨晴間
水無月の菓子と敦盛団子かな
犬枇杷の青き仏師の庭静か
亀の子の後足ぐぐと伸ばしをり
水音の段を重ねし造り滝
唐門や若葉の蔭の緋蠟燭

田尻 勝子

波寄する因幡鱈の瀬大夕焼
去りて又頭上に來たる春の雷
水の瀬の飛び石隠す茂りかな
七人の小人がここに梅雨茸
ざりがにの考える人のポーズかな
初夏や手のりインコの怖面

住田千代子

山門に須磨の夏山仰ぎけり
青嵐一の谷よりわだななかへ
燕の子仏師の家に生まれけり
木漏れ日に萍の影流さるる
疲れぬし目の潤へる苔青し
ひと夜あけ七夕笹の瘦せにけり

平居 滯子

玫瑰や文ある瓶の漂着す
火遊びの白兎の浜よさみだるる
厨ごと麦茶作りに始まりぬ
我が俳句載りたる俳誌曝しけり
欠号を確かめながら書を曝す
悌は紫煙の中に原爆忌

赤松有馬守破天龍正義

駐在の飲まずに帰る麦茶かな

平成の次は乱世か時鳥

平成のちよちよ舞ひ漢夏を病む

浮世かな梅雨の出水に足取らる

蛇苺いうれい沼の入口に

幽霊の一瞬窓を覗きけり

谷口 一献

炎天に光る産着とピアスかな

短夜の夢に母恋ふ孫愛し

瀧壺を覗き込みゐる蝉時雨

遠き日の景蘇る夏出水

梔子の白を寂しと思ふ日々

きんきんに冷した麦酒我にくれよ

赤松有馬守破天龍正義

臃かな見果てぬ夢の夢を見し

しわくちやの譲り受けたる鯉のぼり

初孫の報せを聞くや茶摘み頃

葉の裏に蛍の光透けてをり

少しずつ数増えてゐる蛍かな

額の花二階の人をちらと見し

(先月欠落分再掲)

延川五十昭

篠の子の囲む神話の砂像かな

二人して砂像をつくる夏の浜

童謡の歌碑を横切り夏燕

玫瑰や鰐の背中に似し岩場

猛者海老の串にうたれし夏料理

白兎みそぎし池の蒲の花

六^り花^っ集^{かし}
集^{やう}



九月到着順

善野 行

教へ子に母の面影 聖五月
わぶ人に夜をかけて鳴けほととぎす
さざ波をこらへて鷺の発ちにけり
夏燕鼻先へ来ててひるがへす
緑蔭に鯉のうねりの波撃る

大内 幸子

信号待つ向かひの庭の花石榴
湯上がりの植田の風に身を反らす
ほととぎす朝の静寂を覚ましけり
蛇苺名にはあらずや紅いとし
町医来て胃カメラ無事に半夏草



9月作品から

平成のちよちよ舞ひ漢夏を病む

赤松有馬守破天龍正義

「ちよちよ舞い男」をあれこれ調べてみたが、どの辞書にも百科事典にもない。そういう場合は赤松一族のルーツ、播州弁であることが多い。主宰が勝手に推測すれば、蝶々が舞うようにあっちへ行ったりこっちへ行ったり、落ち着きのないことを言った言葉かと思う。つまり自画像のことで自虐であろう。この夏句会の後で気分がすぐれぬと自ら病院へ駆け込んで即入院になった。

灌壺を覗き込みある蝉時雨

谷口 一献

灌壺は覗き込みたいと思うのが人の心理。また、覗き込んでいたら、後ろから押したいと思うのも人情。ことりの句に「滝つぼに男を押しして来たところ」というのがある。常に危険を伴う人は魅力のある人の証拠。女性に後ろから突き落とされるのも、男の魅力。蝉しぐれは聞いているうちは聞こえるが、途中で聞こえなくなるし、ふと耳にしたらもう離れない。もっとも年中蝉しぐれの中にいる老人も最近増えた。また、滝つぼから滝を登る遊び「シャワークライミング」も多いという。龍や鯉じゃあるまいし。主宰は蝉の木に登ってシャワークライミン

グを経験している。

町医来て胃カメラ無事に半夏草

大内幸子

半夏草は「半夏生草」のことだろう。ただ単に「半夏生」といえば七十二候の一つ。夏至から十一日目に当たる日で、半夏生草と書いて「はんげしょう」と読ませる場合もあるようだ。だが、あまり拘ると、句が詩からはなれてしまう。「片白草や三白草」とのいうが、幸子のいう「半夏草」というのも可能な様な気がする。この句の場合は生えているとか庭にあるとかの句であれば「半夏生」でもいいのだが、半夏生の日に医者か町へ派遣されてきた、とも鑑賞できる。